

- 矢作川の河畔林
- 河畔林の動物
- 川辺とつながること
- はじめまして
- 「森の健康診断」が発刊されました！

今月は…河畔林

矢作川の河畔林

洲崎燈子

川辺はしばしば洪水などによって環境が変化する不安定な立地です。浸食が起きたり、土砂や石が移動すると、そこに生えている植物は大きなダメージを受けます。しかし、堆積によって新しく植物が定着する環境ができることもあります。そのため川辺には、同じ地域の安定した環境とは異なった、攪乱に強い独特の植物群が見られます。それらの植物は、しばらく水をかぶっても生きていられる、夏の暑さや乾燥といった河原の厳しい環境に耐えられる、折れたり埋まったりした場合の再生力が強いといった特性を持っています。こうした植物の多くは、安定した立地では他の植物との競争に負け、衰退してしまいます。

川に限らず水辺の自然は、治水上の必要性が優先されてきた結果、日本中で大きく減少してきました。上流域の山地溪流に沿って成立する林を溪畔林と呼ぶのに対し、中～下流域の扇状地や氾濫原、中州に見られる林を河畔林と呼びます。中～下流域では周辺の土地開発が進み、まとまった河畔林は全国的に見ても少なくなっていますが、矢作川では河畔林が連続した状態が残されています。



矢作川の川辺の竹林

矢作川中流（河口から約37～44kmの範囲）で行われた植生調査の結果から、矢作川の川辺には竹林（殆どがマダケ林）が広がっており、その中にこの地域に特徴的な河畔林の構成種であるニレ科のムクノキやエノキ、アカメヤナギやコゴメヤナギ、ジャヤナギといったヤナギ類の高木を主体とした落葉広葉樹林がまばらに見られることが分かりました。竹林は1970年頃から急速に拡大してきています。こうした竹林は、地中に張りめぐらされる根が護岸の役割を果たすため、水害防備林として水衝部に、岸に沿って細長く植えられたもので、竹材の切り出しと利用が行われなくなったことと、ダムなどの影響によって洪水などの川らしい攪乱が減り、河川敷に土砂の堆積が進んだことにより拡大してきたと考えられました。今や竹林は矢作川本流の川辺景観を代表する植生となっています。

手の入らなくなった竹林内では竹稈の密度が1㎡あたり5本にも達していて、こうした場所では林の中に光が入らず、他の植物は殆ど見られません。密度が高くなって1本1本の竹稈に栄養がいきわたらず細くなっていることや、土壌のうすい川側に竹林が広がりすぎていることから、台風や増水時に竹が倒れる現象もよく見られます。一見緑豊かな矢作川の川辺ですが、荒れた竹林が生き物の多様性を下げ、人の川岸へのアプローチを妨げています。調査から、竹稈の密度を1㎡あたり2本程度にまで下げれば、林内に多くの植物が見られるようになることがわかりましたが、本来の河畔林を構成する落葉広葉樹の芽ばえが成長するにはもっと明るい環境が必要です。矢作川の川辺を生き物の豊かな、人にとっても魅力的な環境にするにあたり、効果的な竹林管理を進めることはもっとも大きな課題といえるでしょう。

（すぎき とうこ、豊田市矢作川研究所、主任研究員）

河畔林の動物

間野隆裕

増水、時には氾濫するなど、変化を常とする河川環境には、その変化に適応した生き物が生息していました。しかし現在では治水事業により攪乱が起こらなくなり、河川敷には河畔林が発達してきました。その変化に伴ってそこに生息する生き物も次第に変わってきました。

ホンドタヌキは大型哺乳類の中でも最も身近に見られる種類ですが、豊田市扶桑町では、密生した河畔林が、日中の止り場となっており、出産・育児の中心的な場所としても利用されていることがわかりました（矢作川研究10号）。かつて堤内地を中心に生息していたものが、宅地や道路などの開発・造成によって追いやられ、現在発達した河畔林が安全なすみかになっているのかもしれない。

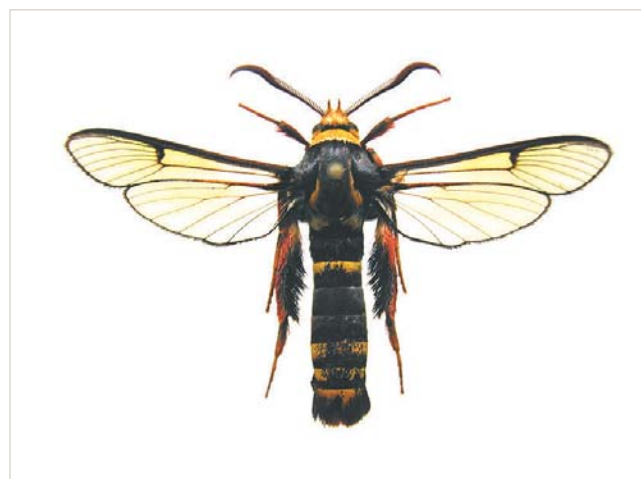


図1：スズメバチに擬態するキタスカシバ

河畔にはヤナギ類が生育していますが、そこには多くの昆虫がつかまいます。キタスカシバというガもその一種です(図1)。このガは昼飛性でご覧のようにスズメバチと見間違えるほどよく似ています。シベリアから北海道・本州に分布する北方系の種類で、近年まで愛知県では確認されていませんでした。それが、河畔林の調査によって都心部に近い寺部町の矢作川で初めて記録されました（矢作川研究5号）。一方、幼虫がタケを食べるタケアツバは温暖な地方に生息するガの一種で、以前には近畿以西に分布していましたが、最近では愛知県内でも矢作川など平地の竹林で見られるようになりました。気候温暖化の影響もあると思われますが、竹林が発達したことが生息を支えているのは間違いありません。これらの種類は矢作川の河畔林を足が

かりに寒冷地と温暖地の双方から生息範囲を拡大してきたのでしょうか。ただ矢作川沿いにどこまで分布しているのか、まだわかっていません。

オオムラサキはタテハチョウ科の日本最大種で国蝶に指定されています(図2)。この種は国や県の絶滅危惧種にも指定されている稀少種で、幼虫がエノキを食べます。しかし餌であるエノキは有用樹種でないため山では切られることが多く、河畔林として残っているエノキが重要な発生源になっています。



図2：吸水するオオムラサキ 木村修司氏撮影

現在矢作川には橋を架け、人が往来していますが、羽のない生き物にとっては、移動を遮る大きな障害になっています。羽がなく歩き回るだけの甲虫の一種ミカワオサムシには、赤銅色と黒色の個体が知られています。その色彩変異は豊田市富田町と対岸の大河原町で異なることがわかっています（Rio65号）。

このように、矢作川やその河畔林に生息する生き物の様子が、調査によって次第に明らかになってきました。これまでの調査は旧豊田市域を中心に実施してきましたので、新市域を中心とする地域の動物の生息状況はほとんどわかっていません。今後新市域についても調査し、私たち豊田市民の財産である矢作川とそこに生息する生き物について明らかにしていきたいと思っています。

(まの たかひろ、

豊田市矢作川研究所 総括研究員)

川辺とつながること

高橋 聡

川辺をめぐる社会研究でよく用いられている言葉に「川離れ」というものがあります。人びとと川との距離が離れてしまった、というものです。これはもちろん、実際の川との距離が開いて川へ近寄れなくなってしまった、ということを行っているわけではありません。川とわたしたちとのつながり（＝つきあい）が少なくなってしまうということです。相変わらず同じ町内に住んでいるのに、全然つきあいがなくなってしまった友だち同士のようなもので、「楽しいからいっしょに遊ぶ」とか、「気が合わない所もあるけどいっしょにやるしかない」とかいった関係がなくなってしまうと、いわゆる「疎遠」になってしまうのです。

それではどのようなつながりがなくなってしまったのでしょうか。たとえば川へ水を汲みにいくことも、汚れ物を洗いにいくこともなくなりました。上下水道の普及のためです。また、渡し舟によって川を渡るようなこともなくなりました。立派な橋が架かったからです。それから、水害の恐れがある際に、地域が共同で土嚢を積み上げるといったことがなくなりました。これはそれぞれの河川を行政が管理し、責任を持って治水を行ってくれるようになったからです。「川遊び」の子どもたちも減りました。今の子どもたちは、ゲームの方が面白いようです。親御さんも、目の届かない川へ行かれるよりそっちの方が安心な面もあります。

こうして見ると、わたしたちが失ったつながりの多くは、「なんだ、別に川離れしたって問題ないじゃないか」と思えるようなものばかりのようですが、実はそうとも言い切れないのです。その昔、川とかかわるということは、それがどのようなものであれば必ず人同士の助け合いが必要でした。水汲みや洗いものもまた近所同士の助け合いが必要でした。水害対策に至ってはとてもし一人でできませんでした。釣りでも川遊びでも、熟練者や上級生が常に初心者や下級生に目配りしていました。つまり川辺とつながることで、人同士がつながっていたのです。

川辺と離れることで、人同士のつながりも少なくなっていくます。それはつきあいのわずらわしさも減らすでしょうが、人同士の温かみ、そして「一人ではできないこと」をみんなで結束してうまくやるという経験も奪っていきます。たとえば子どもたちが犯罪に巻き込まれたり、ゴミの分別回収がうまく

いかなかったり、森林の管理が行き届かなくなったり、こうした問題は「人離れ（＝人同士のつきあいの分解）」の問題であるとも言えます。

今日、地域みんなにとってよりよい川辺の環境や景観を作っていくという機運が高まっています。こういった事柄は、人それぞれ理想が違うという問題を抱えていて、それがなかなか解決しません。けれども、乱暴に言ってしまえば、当面はそれでよいのです。もちろん問題がすぐに解決するに越したことはありませんが、解決しなくとも、解決しようとする人びとが思い続け、いっしょに考え続けることで、人びとはまた【川辺をつうじて】つながり合えるのです。結論を急いで大げんかをして口も聞かなくなってしまうよりも、ただいっしょに考え続けるというだけで、人同士の温かみや結束が取り戻していける方がずっとよいのではないのでしょうか。

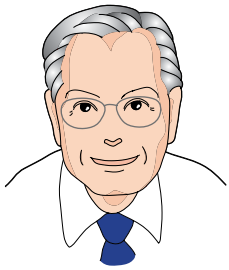
矢作川流域は、他の地域に比べて「人離れ」が深刻ではない地域とよく言われます。そうであるならば、これからの社会の変化の中でも、このつながりを保っていくことは大変大切なことです。「川辺のこと？ 別に俺には関係ないや」と思う方もおられるでしょう。けれども、川辺の環境や景観を考えていくことは、単に川を綺麗にしようということばかりではなくて、川とのつながり、ひいては人同士のつながりを保ち、また強くしていくためにも大変重要なことなのです。



(たかはし さとる、豊田市矢作川研究所 研究員)

はじめまして

水谷 清



38年間の勤めを終え4月より豊田市矢作川研究所の一員に加わることになりました。よろしくお願いします。

豊田市に移り住んで38年、二つ目の故郷・豊田にお気に入りの場所を見つけました。1つは、

猿投山を背にする舞木の桃畑です。林檎と岩木山（青森県）、桃と富士山（山梨県）、菜の花と開聞岳（鹿児島県）といった自然と農業が織り成す全国名の知れた花のある風景のひとつに数えても良いと思っています。

また、古巣水辺公園より眺める猿投山と矢作川の組み合わせも大変気に入っています。川面を射る光の乱舞、

水辺を飛び交う鳥や蝶、その向こうに悠然と立ちつくす猿投山。水の流れとともに時も流れていく、安らかで穏やかなひととき。山と川は一体である、そう想えてならない。・・・自然の営みや自然のメカニズムは時には神秘であり、魔法の力を感じます。

そんな想いがぐるぐると駆け巡り、そうした神秘の世界といかに関わっていくのか、付き合っていけるのか。答えを見つけることが出来るであろうか。そう問いかけをしながら、桜・辛夷・椿・・・といった春の花の中、自転車を走らせ矢作川研究所に通う日々です。まずは、研究所デビューの挨拶です。重ねてよろしくお願いします。

（みずたに きよし、あたらしい所長）

「森の健康診断」が発刊されました！

昨年6月に実施された「矢作川^{もり}森林の健康診断」をとりあげた本が築地書館から発刊されました。森林と流域圏の再生をめざして、森林ボランティア・市民・研究者の協働で始まった、手づくりの人工林調査のとりくみとその可能性をわかりやすく紹介しています。

蔵治光一郎＋洲崎燈子＋丹羽健司 [編]

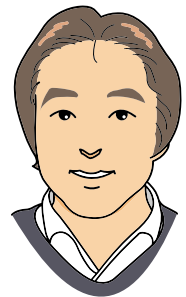
築地書館 四六判 208頁 2,100円（税込）

*ご購入に関するお問い合わせは矢作川研究所 洲崎まで



はじめました。

今年も矢作川ではアユの遡上する季節になりましたが、明治用水頭首工において4月19日時点でまだアユの遡上する姿は確認できていません。昨年よりも2週間、一昨年よりも3週間ほど遅れています。ただ、矢作川河口の碧南火力発電所温排水口の調査では、サイズはやや小ぶりなものこれまでと比較しても遜色ない数のアユが獲れているので、このRioが皆様の手元に届く頃にはまとまった遡上がみられると予想しています。天然アユ調査会が発足して10年を迎え、アユの遡上に関するデータもかなり蓄積されてきました。これからは、毎年のアユの遡上時期、大きさ、遡上数といった特徴を、過去のデータと比較しつつより緻密に把握していきたいと思います。（山本）



お詫び Rio No.95の4ページで「矢作川天然アユ・シンポジウム」の開催時間が「午前1:30～4:30」となっていますが、正しくは「午後1:30～4:30」です。ここに訂正し、お詫び申し上げます。